

第 38 回大会シンポジウム報告

討を欠かすことはできない」という趣旨の感想を寄せた。

また臨時会員として3年間にわたり本自主シンポを傍聴した藤川信子・山崎みね子は、「報告者が研究者だけでなく療養所在園者、指定討論者が元・入園者であることに新鮮な驚きと共感を覚えた。強制収容・隔離政策の非人間性、それが本人のみならず一家親族まで社会的な差別を受けている事実には大きな衝撃を受けた。療養所によりその地理的・歴史的条件の違いはあるが『らい予防法』がいかに悪法であったかを痛感した。法は廃止されても、“見えない壁”として現存していること、患者・家族が国家権力により人間の尊厳と権利を蹂躪されてきたという事実を多くの人に識って欲しいと強く思う」という感想を寄せた。

3年間にわたって司会を担当した平田は、昨年のシンポ後に栗生楽泉園発行の『高原』誌に寄せた「まとめ」(2000年5月号掲載)で指摘した4点は今後も課題として残っていること、さらに今回の長島愛生園に関わっていえば、①本園は日本初の国立施設であり、しかも明治30年代からいち早く「癩病隔離所」の設立を主張し、その後の救癩事業の中核を担った光田健輔の癩者処遇観が凝集された特別な位置と役割と意義を持つ療養所であるだけに、光田の“愛生人”構想はノーマライゼーションの対極にある隔離型処遇観の典型として光田の全生涯と業績を踏まえたよりいっそうの特質の解明、②指摘された光田の処遇観の根底にある優生思想の影響に関する思想史的解明、③光田の処遇観の他の療養所(旧植民地を含む)への影響とその浸透範囲およびそれに対する疑義・批判意識の有無(光田を相対化する度合)を民間私立の癩病院等での処遇との比較をも含めての検討、などが必要ではないかと指摘した。そして3年間のシンポを締め括るにあたって、再度確認したいことは、ハンセン病患者への差別・偏見・人権侵害の歴史とそれを生み出した諸要因の解明と克服への努力は、二度と悲劇を繰り返さないという未来責任を個人レベル・国家社会レベルでそれぞれ自覚し個人意志・国家社会意志に深く刻み込むことを意味するということ、言い換えればハンセン病患者問題が突き付けている「人間の尊厳」に関わる重大な問題を問い解決していくことは、ハンセン病患者の人間回復にとどまらず、私たち国民の人間性の回復・向上の道を開拓していくことであり、日本の国家・社会もその人道性・倫理性の質を回復・向上させていくことでもあるということ、そのことを肝に銘じて問題解決に向けてそれぞれの持ち場・地域で今後とも努力していき

ましようと呼び掛け、司会を終えた。

最後に企画を担当した清水から、本テーマによる連続自主シンポは今回でひとまず終了し、今後は本シンポを発展させて、21世紀のアジアにおけるノーマライゼーションをめざし、日本と旧植民地・占領地の障害者・病者(ハンセン病を含む)問題の史的比較研究をテーマとした連続シンポを関係各国の研究者・当事者の参加も得て開催したいのでご協力いただきたいとの呼びかけがなされた。なお本稿は、企画者と司会者が協議しながらまとめた。(清水 寛・平田勝政)

自主シンポジウム 20

高機能広汎性発達障害をもつ
子どもの支援

一心、仲間、コミュニケーション

企画者 大井 学 (金沢大学教育学部)
司会者 杉山登志郎 (静岡大学教育学部)
話題提供者 高橋 和子 (大阪教育大学)
辻井 正次 (中京大学社会学部)
大井 学 (金沢大学教育学部)
指定討論者 別府 哲 (岐阜大学教育学部)

本シンポジウムでは、高機能広汎性発達障害をもつ子どもに対する支援について、1) 同じ障害を持つ子ども同士の同質集団の体験、2) 大人の集団の中での会話に対するサポート、ならびに3) 相手が健常か高機能広汎性発達障害をもつかによる仲間相互作用の違い、の3つの観点からの話題提供を受けて議論を行った。

第1の観点から辻井は彼らが組織している地域援助システム「アスペの会」に参加している事例を紹介しながら、高機能広汎性発達障害をもつ個人の生涯発達の中で児童期のもつ重要性を指摘した。青年・成人期の不適応事例では、もともとの社会性の障害に加えて情緒的な不適応反応・パーソナリティの歪み・他者への迫害的構えから、一過性の精神病状態に容易に陥っている。それは、適切な診断を受けないまま一貫性のある教育的介入もなされず、悪循環を重ねていった結果でもある。児童期の問題は「わがまま」「しつけ」などとして理解されるにとどまり、仲間関係を形成できないでいる。辻井は発達経過における「10歳の節目」の存在を指摘する。そこでは「心の理論」課題を通過し、多動や不器用が改善する途中でトラブルが減少する。それとともに自分だけで楽しんでいる自閉的ファ

第38回大会シンポジウム報告

ンタジーを共有したいと望むようになり、「まわりのみんな」のように楽しみたいという希求が生じてくる。高機能広汎性発達障害をもつ子どもたちの同質集団はそれを満たす場となる。アスペの会に小3以来6年間参加している中3の事例Aは、授業中に立って中日ドラゴンズのまねを演じるほどの野球好きだった。が、同年齢児とプレーする技術はなく、アスペの会でその機会を得て、仲間とのトラブルを起こしながらも共通の楽しみをもつ仲間を発見し、下級生への配慮をするリーダーに成長した。小3の事例Bは、1年間のグループ体験を通じて、仲間がパニックを起こすことへの親和的な感覚も含めて他者と「一緒に何かすること」に慣れ、それを楽しみとするようになった。辻井はこうした事例をもとに、高機能広汎性発達障害をもつ子どものグループを大人が治療教育的に抱える必要性を指摘し、その際の考え方を提案した。まず彼らの生来的な社会性の障害が、関係性・愛着形成の困難をもたらし、さらにストレスに対して脆弱な「モザイク的な自己感覚・自我機能」をつくりだす。それは通常の集団内での「脅かされ体験」を引き出す結果となり、脅かされない他者との体験が彼らにとって必須となるに至る。そのための対応は「集団を作る」ことではなく「集団を作るのが苦手な」子どもたちが「いっしょに居る状況」をつくることである。かかわりの中で「集団が形成され」、ソーシャル・スキルの向上のみならずパーソナリティ水準での変化がそこからは起こってくる。

第2の観点から高橋は高機能自閉症をもつ彼女の子息Kに対する、9歳10か月からおよそ月に1回の割で1年間に渡って行われた、Kが大人集団に参加した際の会話への援助について報告した。KはINREAL研究会のメンバー数名と例会時の昼食時間に同席し、そこでの会話が援助対象とされた。Kが最初に示した会話上の問題の1つは「勝手な話題変更」で、その原因は文脈の共有ができておらず、相互に何がわかっており何がわかっていないかが、K自身にわからないことと考えられた。しかし大人からの援助を通じて、やがてKは話題を変える合図（「話は変わるんだけど、その南京町の近くの丸善へ行った」）を利用したり、自分が新たに提供しようとする話題が直前の話題（例：南京町での飲茶）とどうつながっているかを示す（「丸善は南京町の北出口を出て東に行ったところにある」）ようになった。Kには話題の変更とは別に、「相手のことばが途切れたと早合点して無理に割り込む」などの問題もみられた。これについても、他の大人にターン

を取られても割り込まずに待っていたり、適切に自分のターンを取ることもできるようになった。一方、Kが大人の会話に参加する際の話し手―聞き手関係の構造にも変化がみられた。当初は、それぞれの大人と1対1の会話となり、また会話が相互的でなく大人側が質問ばかりするか、逆にK自身が一方的に質問するかであった。後には3人の大人同士の間で重層的に展開する会話にKが加わる（2名の大人の話に加わる第3の大人のことばに対してコメントする）ようになり、また、相手の話にKが同意したり情報を付加したりする等双方向的な会話が可能となった。Kに対する援助者のことばは次のような特徴を備えていた。1)「待つ」と指示するなどの直接的言明、2)話題の前提を説明する、3)身体や顔（視線）を話しかける相手に向ける、4)手差しなどの身振り、5)肩を叩いたり名前を呼ぶなどの注意喚起。これらは、Kと大人集団との話題の共有を助けること、Kの会話相手の意図を明らかにすること、会話の原則を守るように促すこと、に役に立ったと考えられた。なお高橋は、こうした大人集団内での試みにとどまらず、高機能広汎性発達障害の同質集団内での会話援助についても検討する必要性を指摘した。

第3の観点からは大井が幼稚園年長の6歳の事例の健常クラスメイト2名との仲間相互作用を、高機能広汎性発達障害を持つ別の5歳児1名とのそれと比較した結果を報告した。健常クラスメイトとの相互作用の特徴は、第1に本事例から開始された伝達の50%強が仲間の反応を得られなかったこと、第2に仲間から開始した伝達に対する本事例の反応の40%弱が関連性をもたなかったことの2つであった。仲間の反応を得られなかった本事例の開始にみられた特徴はつぎの通りであった。〈仲間の話題・注意の対象と無関連ないし関連性がわかりにくい、または仲間にとって自明あるいは仲間が無用な情報の提供、前提が共有されない、仲間の注意を得ることの失敗、過度に特殊な言及〉。反応を得られたのは、〈仲間の話題・注意の対象、ないし進行中の共同活動に関連する情報の提供、直前に共有された話題の反復、仲間の注意確保〉であった。仲間には有用な情報を提供して反応を得ることは希であった。2名の仲間からの開始が〈内的状態を叙述したり、想像遊びについて話したりする〉時、本事例は関連性のある反応を返せなかった。本事例がそうできたのは、〈仲間の彼女に対する、実際的な行為の指示、質問、ふざけ・みせびらかし、現実の叙述、進行中の共同活動に関連するもの、非難〉についてであった。高機能広

第38回大会シンポジウム報告

汎性発達障害をもつ別の5歳児との相互作用は、健常クラスメイトとのそれと著しく異なっていた。本事例のほとんど開始に対してこの5歳児は反応していたし、また彼の開始に対する本事例の反応はほとんど関連性をもったものであった。ただし相互作用の内容は、遊びをめぐるいざこざ、行為の依頼と拒否、許可の要請と承認、質問と応答など単純なものであった。こうした2つの仲間相互作用の違いから、健常な仲間との場合に比べて高機能広汎性発達障害をもつ子ども同士の場合は、相手に影響を与えるという対人的効力感、理解し合えるという相互的共有の感覚を深く体験できると考えられた。また、本事例にとって健常な仲間との会話は相当オーバーロードで本事例の語用技能では太刀打ちが難しい挑戦的なものであったが、同じ障害を持つ相手との会話では失敗が少なかった。またそこには音調や身振りなどよりプリミティブな伝達技能を使う機会が含まれていた。高機能広汎性発達障害を持つ者の同士の相互作用はソーシャル・スキルや伝達の学習にとって望ましい環境となることが期待された。

別府（指定討論者）は、コミュニケーションと心を読むことの関係、内的ワーキングモデル、自他の関係認識と自己認識の一体性、の3つの視点から仲間の中での育ちを検討することを提案した。また、高機能広汎性発達障害を持つ子どものグループはどのような年齢、心の理論を含む発達のどの水準で必要となるのか、健常な仲間や大人はこのグループとどういう関係にあるのかについて問いかけた。話題提供者からは、別府の指摘する視点からの検討の必要性を支持する見解が述べられた。さらに高機能広汎性発達障害を持つ場合も健常児集団が主要な場となるべきであること、ただし、同時に少なくとも児童期には独自の同質集団が必要なこと、それは就学前でも、また思春期以降にも独自の意義を持ちうるという考えが示された。なお、フロアからの「心の理論と問題行動の関係の議論は慎重でなければならない」という意見（奥田）について、辻井はパス解析に基づいて心の理論の獲得と不適応の発現の関係を示唆する研究結果を得たことを紹介した。

杉山（司会）はまとめの中で、幼児期からの健常仲間との相互作用を見直す必要を指摘し、また、心の理論獲得後に十分な仲間スキルを持たないまま他児とのかわりを求めて行くことに伴う問題を認識する重要性を指摘した。（大井 学）

自主シンポジウム 21

訪問教育の今日的課題（その2）

—全国状況と地域的状況—

企画者 加藤 忠雄
 司会者 加藤 忠雄
 話題提供者 西村 圭也（奈良県立明日香養護学校）
 猪狩恵美子（都立小平養護学校）
 西園 健三（鹿児島県立武岡台養護学校）
 平賀 哲（新潟県立新潟養護学校）
 指定討論者 渡辺 昭男（鳥取大教育地域科学部）

1. 企画趣旨

昨年報告者たちは「訪問教育の今日的課題—障害の重度・重複化とニーズの多様化に対応し得る訪問教育の在り方—」と題するシンポジウムを行った。3人の話題提供者から、訪問教育の全般的状況・問題点、親の会による取り組みの到達点・課題、地域代表として学会開催地北海道の訪問教育の実態・課題等について提案され、論議を行った。しかしここでの論議は主として話題提起にとどまり、深い検討はなされなかった。

今次シンポジウムでは、話題を絞り検討を深めることとした。

今回シンポジウムでは、諸種問題のある中で、“地域的特徴”の問題に絞り論議することとした。

“地域的特徴”の問題としては、各地の進展状況の差異の問題があり、地域による差異が生じている。

そこで今回は、鹿児島、東京、新潟の3都県に視点をあてて検討を行うこととした。

鹿児島は、訪問教育進展の状況が相対的により不十分な地域として、新潟は、不十分な状況にありながらも、諸種の取り組みが行われ現在に至っている地域として、東京は、全国中進展が最も進んでいる地域として、選択し、現状、歴史、課題、について提起を受け、検討を行った。

2. 話題提供者発言要旨

1) 西村圭也

訪問教育において各種の地域格差がある。在宅訪問教育について授業時数・日数は120分×3回が平均であるが、東北の一部、九州の多くの県で依然として2回×120分が行われている。また在宅と施設訪問につ